

古典に見えるギンバイカ（承前）

水谷 智洋

ギンバイカの小枝は神々への祈りに際しても使われます。あたかも、祭具のひとつかのようなようです。アリストパネースの喜劇から2ヵ所引用します。

(11) Aristophanēs, *Sphēkes* 860-2

ΒΔ. ἀλλ' ὡς τάχιστα πῦρ τις ἐξενεγκάτω 860
καὶ μυρρίνας καὶ τὸν λιβανωτὸν ἔνδοθεν
ὅπως ἂν εὐξώμεσθα πρῶτα τοῖς θεοῖς.
ブデリュクレオン 誰か大急ぎで家のなかから火と
桃金嬢^{でんにんか}の枝と乳香を持って来い。
まず神々にお祈りしようというのだ¹²⁾。

(12) Aristophanēs, *Batrakhoi* 325-30

ΧΟ. ὦ Ἰακχε, 325
ἐλθὲ τόνδ' ἀνὰ λειμῶνα χορεύσων,
ὁσίους ἐς θιασώτας,
πολύκαρπον μὲν τινάσσω
στέφανον μύρτων· 330
秘教入会者のコロス おお、イアッコス
この草原をところせましと足ふみ鳴らし踊らんために、いざ来ませ、
うかれたる奉教者へと

頭上にはミルトの実も
さわなる輪飾を
舞わしつ。

(11) では手折っただけの小枝ですが、(12) では *στέφανος* リース (wreath) に加工されています¹³⁾。このギンバイカのリースは、行列をなしてエレウシースの神域に向かう神官と秘教入会者たちの正式の頭飾りであった、と Merry は注記しています¹⁴⁾。また Stanford は、喜劇が上演されるレーナイア祭 *τὰ Λήναια* は真冬のことだから、ギンバイカには花のあとの実がたくさんついていたろう、それが *πολύκαρπον* という形容詞を選ばせたのだろう、と説明しています¹⁵⁾。そのとおりでしょう。

ギリシアの神話伝説中、最大の英雄というか豪傑ヘーラクレースが頭にリースを巻きつけて飲酒する様子が、エウリーピデースのお芝居に見出されます。

(13) Euripidēs, *Alkēstis* 826-32

HP. ἀλλ' ἡσθόμην μὲν ὄμμι ἰδὼν δακρυρροοῦν
κουράν τε καὶ πρόσωπον· ἀλλ' ἔπειθέ με
λέγων θυραῖον κῆδος ἐς τάφον φέρειν.
βία δὲ θυμοῦ τάσδ' ὑπερβαλὼν πύλας
ἔπινον ἀνδρὸς ἐν φιλοξένου δόμοις, 830
πράσσοντος οὕτω. κᾶτα κωμάζω κára
στεφάνοις πυκασθεῖς;

ヘラクレース まったくおれも気がついたのだ、涙にぬれひじた眼だの、切り取った髪や顔を見た時に。だが彼はいま他家の縁者の葬いをするところだと言って、おれにそう思い込ませようとした。そこでおれも強いて心に景気をつけ、この門を越えて、客人を大切にすることの男の屋敷でもって飲みつづけたのだ、しかもこの取り込みぎわに。それだのにおれは花冠を頭にまきつけて酒にうつつを抜かしているのか¹⁶⁾、

『アルケースティス』は、前 438 年の悲劇の競演で、たぶん、サテュロス劇 *τὸ σατυρικόν* の代わりとして上演された作品と考えられています。主人公のア

ルケースティスはペライ Φεραί の王アドメートスの妃で、死が迫った夫の身代わりに死ぬことを申し出、夫に見とられつつ息絶えます。その悲しみに包まれた館を旧友ヘーラクレースが訪れます。アドメートスは遠来の客に不義理は許されないと、存分の饗応を召使に命じます。そこでヘーラクレースは、館の様子がなにかおかしいと不審に思いながらも、飲みつづけたというのです。ここで彼は「頭にリースを巻きつけて」といっていますが、何のリースかは分かりません。手掛かりは、ヘーラクレースに先立って館を訪れていたもう一人の客人に求められます。彼は、豪傑と同様、たらふく飲み喰いし、高歌放吟するのですが、「頭にギンバイカの小枝を巻きつけて」 στέφει δὲ κῤῥα μυρσίνης κλάδοις (759) いたのです。とすれば、ヘーラクレースの頭上のリースもギンバイカのそれであった、と考えて差し支えないでしょう。

さて、ヘーラクレースたちは神話伝説中の人物ですが、劇詩人の時代の一般人は、酒食の場でギンバイカのリースを頭に巻いたのでしょうか。そのことを明確に伝える文献を私は見つけることができませんでした。ですから断言はしませんが、宴席に連なるときなどに、芳香を発するギンバイカのリースを着用することは珍しくなかったのではないのでしょうか。次に引くアリストパネースの8行がその裏付けになりましょうか。

(14) Aristophanēs, *Thesmophoriazousai* 445-52

ΓΥ.Β. ἂ δ' ἐγὼ πέπονθα, ταῦτα λέξαι βούλομαι. 445
 ἐμοὶ γὰρ ἀνὴρ ἀπέθανεν μὲν ἐν Κύπρῳ,
 παιδάρια πέντε καταλιπὼν, ἀγὼ μόλις
 στεφανηπλοκοῦς' ἔβοσκον ἐν ταῖς μυρρίναις.
 τέως μὲν οὖν ἀλλ' ἡμικάκως ἐβοσκόμην·
 νῦν δ' οὗτος ἐν ταῖσιν τραγωδίαις ποιῶν 450
 τοὺς ἄνδρας ἀναπέπεικεν οὐκ εἶναι θεούς·
 ὥστε οὐκέτ' ἐμπολῶμεν οὐδ' εἰς ἡμῖν.

女の乙 それで私が現に受けた被害だけを、述べようと存じます。つまり私のつれあいは五人も子を残したままキュプロスでなくなりましたもんで、私はようやくと桃金嬢^{ミルテ}市場で花冠^{かざし}をつくって子を育ててきたわけなんです。それがこれまではまあやっこさっとこ身過ぎをしてこられたのを、今じゃこの人(=エウリーピデース)

が歌舞伎のなかのせりふでもって、神さまなんていないもんだと
旦那衆に信じさせちゃったんです。それでもう前の半分さえも商
売がありませんの。

アテナイの女性たちは、現代の暦の 10 月の終わり頃、4 日間にわたって「掟
授けの祭」τὰ Θεσμοφόρια を挙りました。これは「掟を授ける両神」τὼ
Θεσμοφόρῳ、すなわちデーメーターとペルセポネーの母娘神を祝うものでし
たが、その第 3 日に女性たちは、女の敵エウリーピデースを糾弾する議会を開
いた、とはアリストパネス『女だけの祭』(たぶん前 411 年上演)の設定です。

ここで私の関心は 448 行の ἐν ταῖς μυρρίναις にあります。呉訳では「桃金娘市
場」となっていますが、私は L-S-J の‘the myrtle-wreath-market’を採り、「ギンバ
イカのリースを商うマーケット」としたいと思います。アゴラーの一劃にそう
いう店が何軒かあって、ギンバイカの小枝もそこで買うことができたと理解し
ておけばよいのではないのでしょうか。ところで、憎きエウリーピデースが「神
さまなんていないもんだと旦那衆に信じさせ」ると、どうしてギンバイカのリ
ースの売り上げが半減するのか、私にはその理屈がよくのみこめませんが、「女
の乙」はすぐ後でいいです。「じゃ私は市場へまいります。旦那衆のご注文で、
二十ほど花冠を編まなきゃなりませんもので。」ἀλλ’ εἰς ἀγορὰν ἄπειμι· δεῖ γὰρ
ἀνδράσιν / πλέξαι στεφάνους συνθηματιαίους εἴκοσιν. (457-8) 結構、商売繁盛して
いるようじゃありませんか。この「旦那衆のご注文」は、案外、宴会用のリー
スだったかも¹⁷⁾。

ギンバイカのリースは、勝利者に授けられる栄誉のしるしとしても用いられ
ました。ギリシア最大の合唱隊歌の詩人ピンダロス（前 518 頃—438 頃）とロ
ーマの博物誌家プリーニウス（23/4—79）にその例を見出すことができます。

(15) Pindaros, *Isthmionikai* 8. 65-7

άλίκων τῷ τις ἄβρὸν 65

ἀμφὶ παγκρατίου Κλεάνδρῳ πλεκέτω
μυρσίνας στέφανον,

同じ年頃のだれかが

パンクラティオンの勝者クレアンドロスのために
ギンバイカの清らかなリースを編むがよい。

『イストミア祝捷歌集』第8歌は、少年組のパンクラティオンで優勝したアイギーナのクレアンドロス（前478年？）の頌歌です。同じ歌集の第4歌では、同じ競技で優勝したテーバイのメリッソス（前478年？）が称えられています。「この男は頭をギンバイカの小枝で白く飾って二重の勝利を現した」*λευκωθεῖς κόρα / μύρτοις ὄδ' ἀνὴρ διπλόαν / νίκαν ἀνεφάνατο* (69-71) とあります。ここには *στέφανος* の語はありませんが、白い小花がたくさんついたギンバイカのリースを指していることは確かでしょう。しかしながら、ピンダロスの4巻の祝捷歌集のうち、なぜ『イストミア歌集』のみにギンバイカのリースが出るのかは、詳らかではありません。イストミア競技が行われるコリントスもまた、ギンバイカで名高い土地だったのかもしれませんが¹⁸⁾。

(16) プリーニウス『博物誌』15.125

ギンバイカはまた戦争にも関わりをもっている。プブリウス・ポストゥミウス・トゥベルトゥスは執政官在任中、サビーニー族に勝利して凱旋したが、彼ははじめて小凱旋式によってローマ市に入城した（前503年）。流血を見ずして穏やかに事態を収束したというので、このとき彼は勝利の女神の〔聖木〕ギンバイカのリースをまとして *myrto Veneris victricis coronatus* 入城し、ギンバイカを敵にさえ好ましい樹木に仕立てあげたのであった。これ以降、ギンバイカは小凱旋式を行う将軍たちのリースとなったのであるが、例外はマルクス・クラッスで、彼は逃亡奴隷とスパルタクスに勝利したとき、ゲッケイジュのリースをまとして *laurea coronatus* 入城した（前71年）。

ゲッケイジュの場合は「月桂冠」のほうがはるかに一般的でありましょうが、本稿ではあえて「リース」で通します。さて、ではギンバイカとゲッケイジュはどのように使い分けるのか、それはつまり小凱旋式 *ovatio* と凱旋式 *triumphus* の違いでもあります。敵が奴隷や海賊、あるいはあまりに弱くて「ほこりも立たない勝利」 *victoria impulverea* が得られた等の場合はギンバイカのリース、そうではなく、本格的な敵に宣戦布告をしたうえでかちえた勝利の場合は、指揮官がゲッケイジュのリースをまとう仕来たりだ、と Aulus Gellius（130頃—180？）の *Noctes Atticae* 『アッティカ夜話』5.6.20-3 は説明しています。ギンバイ

カはやはり、ユピテルやアポッローと縁の深いゲッケイジュよりは、一段低く見られていたということなののでしょうか。

ご参考までに、マケドニアの Δερβένι (古代の Λητή) の墓地から出土した黄金製のギンバイカのリースをお目にかけます¹⁹⁾。前4世紀後半の作で、20.9×17.0 cm、テッサロニキ考古学博物館蔵。葉は少し大きすぎます。また、花と果実が同時に存在することはありませんが、ギンバイカのリースのイメージがつかめましょうか。



おしまいには果実です。はじめに引いた『樹木大圖鑑』に「果実は液果で秋に黒青色に熟し」とありましたが、昨年秋に実際に口にすることができました。テオプラストス『植物誌』1.12.1「果汁については、ブドウ、クワ、ギンバイカの果実のように、ブドウ酒のようなものもあり」 τῶν δὲ χυλῶν οἱ μὲν εἰσιν οἰνώδεις, ὥσπερ ἀμπέλου συκαμίνου μύρτου· という記述の正しさを実感しました。以下では「果実」に代え、たんに「実」ということにします。

さて、ギンバイカの実は、なんとアッティカ地方の名産品だったのです。前

4 世紀のアテナイの中喜劇詩人アンティパネースの作になる次のような断片が伝わっています。

(17) Antiphanēs, *PCG* F177 (Athēnaios 2.43 B-C) ²⁰⁾

- A. οἷα δ' ἡ χώρα φέρει
διαφέροντα πάσης, Ἰππόνικε, τῆς οἰκουμένης,
τὸ μέλι, τοὺς ἄρτους, τὰ σῦκα. B. σῦκα μὲν, νῆ τὸν Δία,
πάνυ φέρει. A. βοσκήματ', ἔρια, μύρτα, πυρούς, ὕδωρ,
ὥστε καὶ γνοίην ἄν εὐθὺς Ἀττικὸν πίνων ὕδωρ.
- A. この土地は、ヒッポニーコスよ、全世界にまさるなんとすぐれた品々を産することか、蜂蜜、小麦パン、イチジク。
B. たしかにイチジクは、ゼウスにかけて、
ふんだんに採れるな。 A. 家畜、羊毛、ギンバイカの実、小麦、水。
飲めばすぐ、こりゃアッティカの水とわかるほどだもんな。

いくらおいしくても、たぶん、アゴラーでは水そのものは売っていなかったでしょうが、ギンバイカの実の商品になります。先にその『植物誌』から3度文章を引いたテオプラストスの『人さまざま』11「いやがらせ」Βδελυρίαにこんな一文があります。

(18) Theophrastos, *Kharaktēres* 11

καὶ πληθούσης τῆς ἀγορᾶς προσελθὼν πρὸς τὰ κάρνα ἢ τὰ μύρτα ἢ τὰ ἀκρόδρυα ἐστηκὼς τραγηματίζεσθαι ἅμα τῷ πωλοῦντι προσλαλῶν.
また、広場の人びとの出さかっている時刻には、くるみ屋やてんにんかの店や果物屋に近づき、なにくわぬおしゃべりをしかけながら、立ったまま盗み食いをする ²¹⁾。

「てんにんか」は、むろん、「ギンバイカの実」です。ただし、原文の μύρταには μῆλα「リンゴ」という異読があり、それに伴って後続の若干の単語の扱いが検討されねばならないようです。しかし本稿では、μύρτα 大歓迎です。

アゴラーにこういう店が出ているとすれば、商品としてのギンバイカの実を

供給する人物がいなければなりません。ひょっとしたら、その卸し業者だったのかも、と推測させるような文章がプラトーンの第 13 書簡中にあります。

(19) Platōn, *Epistolai* 13, 361A-B

πέμπω δὲ καὶ οἶνου γλυκέος δώδεκα σταμνία τοῖς παισὶ καὶ μέλιτος δύο.
ἰσχάδων δὲ ὕστερον ἤλθομεν τῆς ἀποθέσεως, τὰ δὲ μύρτα ἀποτιθέντα
κατεσάπη· ἀλλ' αὖθις βέλτιον ἐπιμελησόμεθα·

お子様方に甘いブドウ酒 12 瓶と蜂蜜 2 瓶をお送りします。私どもの帰国が遅れたため、干しイチジクの貯蔵の時期に間に合いませんでした。ギンバイカの実も貯蔵したものの腐ってしまいました。今後はもっとよく注意するようにいたします。

前 365 年頃、シュラーケーサイの僭主ディオニシオスに宛てたというこの第 13 書簡がプラトーンの真筆か否かは、いま私の関心事ではありません。私の関心ないし興味は、この書簡の筆者が収益確保に腐心している農園主のように見えることです。ブドウ酒、蜂蜜、干しイチジク、これらは古代人にとって重要かつ経済的価値の大きな飲料であり、食料であったことでしょう。ですから、それらの生産に絶えず注意を払っている農園主が、今年は時期を逸したため干しイチジクがダメだった、と残念がる気持ちはよくわかります。しかし、栄養食品でもなんでもないギンバイカの実を、なぜ——おそらくは大量に——貯蔵したりするのでしょうか。ギンバイカの実は、たぶん、嗜好品のひとつとして、ギリシア人の食生活ないしは生活にアクセントをつける、なくてはならない一品だった、それゆえに、それなりの商品価値をもっていたのではないかと判断されるのです。プラトーン——今度は正真正銘の——にもう一度登場してもらいます。

(20) プラトーン、『国家』第 2 巻 13 章 372C-D

うっかりして、彼らがおかずも食べることを忘れていたよ。むろん、塩やオリーブやチーズを使うだろうし、野の草や畑の野菜を煮て、例の田舎でつくる煮もののようなものをつくるだろう。またデザートとして、
いちじく えんどう そらまめ
無花果や豌豆や空豆が出るだろうし、彼らは桃金嬢や榎の実を火で炒っ

て、それを肴^{さかな}にして適量の酒をつつましく飲むだろう²²⁾。

発言者は、むろん、ソークラテース。「最も必要なものだけの国家」²³⁾における暮らしぶりが具体的に語られます。そして話が食生活に及んだところで、ギンバイカの実が出てくるのです。実を炒って酒の肴にする！ 私の想像では、火で炒るのなら、果液があまりたまっていない若い実のほうが良さそうな気がします。ところで、酒の肴としてのギンバイカの実はデザートに入るのか、プラトーンの行文からは決めかねますが、Diphilos（前 4—3 世紀の喜劇詩人）の断片 *PCG F80* (Ath.14. 640D) では、ドライフルーツ、ケーキ、アーモンドと並んで「大好きなデザート」*ἡδιστά γ' ἐπιδορπίζομαι* の仲間入りをしています。

次に、デザート云々から離れると、Apollophanēs（前 5 世紀の喜劇詩人）の断片 *PCG F5* (Ath.3.75C) は、ギンバイカの実の効用についてこう述べています。「なによりもまず、テーブルにはギンバイカの実が不可欠だ。いつだって、なにか考えごとをするときは、噛み砕く²⁴⁾のだから。」*πρώτιστα δὲ / τῶν μυρρινῶν ἐπὶ τὴν τράπεζαν βούλομαι, / ὥς διαμασῶμ' ὅταν τι βουλεύειν δέη*。「噛み砕く」といい考えが思い浮かぶだけではありません。プリーニウス『博物誌』23.159 によれば、「口臭をさわやかにする」効果があるそうです。「たとえ噛み砕くのが一日前のことであっても。」の由です。*odorem oris commendat vel pridie commanducatum*. Menandros（前 4 世紀の新喜劇詩人）の *Synatistōsai*『ランチ仲間の女たち』は、そうやって呼吸をさわやかにしている、とプリーニウスはつづけますが、残念なことに詩行は伝えていません。噛み砕くのは、おそらく、若い実でありましょう。

プリーニウスはまた『博物誌』15.118 で、「昔は（ギンバイカの）実のもうひとつの利用法があった。コショウが発見される以前は、その代わりをしていたのだ。」*alius usus bacae fuit apud antiquos, antequam piper reperiretur, illam optinens vicem*.と述べています。そして具体例として、*myrtatum* と呼ばれるソーセージの詰め物にする、イノシシ肉の臭み取りにソースに入れるの二つを挙げています。香辛料としてのギンバイカの実は、「乾燥させて種子を取り除いた」（cf. Apicius, *de Re Coquinaria* 7.270）状態で使うのでしょうか。また、イノシシ肉にかけるソースの作り方は Apicius 8.322 に詳しいレシピがありますが、あまり私どもに必要な情報とも思われませんので、詳細は省きます。

ここで突然ですが、「不都合な真実」をご報告せねばなりません。アリストパ

(21) Aristophanēs, *Lysistratē* 1002-6

使者 ひどいさまでごわす。市じゅうを風の前に灯^{あかり}をもっているかのよう
に、みんな身をかがめて歩いている。女どもは桃にさわることさえ
許さぬ、おいどんらがみんな口を揃えてギリシア全体と和睦せぬう
ちは。

EY. ὑμεῖς μὲν ἄρα ζητε νομφίων βίον.
 やつがしら そいから苑生に下りて白胡麻や桃金嬢の実や
 ひなげしだのはっか草なんかをついばむのじゃ。

エウエルピデス　するってえとあんたがたは、
花婿みたいな暮らしをやってるわけですね。

- 82 -

たうえで、アリストパネースおよび喜劇詩人の断片中の *μύρτον* とその周辺語の出る箇所を再検討してみれば、新たな光景の出現が予期されそうですが、本誌の品位を保つためにも、深入りはさけ、筆を措くことにいたします²⁴⁾。

注

- 12) アリストパネースの訳文（注 8）は（11）（12）（21）が高津春繁訳、（14）（22）が呉茂一訳です。
- 13) 前号では *στέφανος* を「冠」と記しましたが、考え直して本号では「リース」としました。
- 14) W. W. Merry, *Aristophanes, The Frogs* (Oxford, 1884), p. 21.
- 15) W. B. Stanford, *Aristophanes, The Frogs* (London, 2nd ed., 1968), p. 102.
- 16) 『世界古典文学全集 9 エウリピデス』（筑摩書房、1965）所収の呉茂一訳を借りました。
- 17) 「女の乙」に先立つ「女の甲」のセリフに、「ですから奥さんが花冠でも編んでようもんなら、（亭主は）もう恋してるな、と考えるのよ。」 *ὥστ' ἐάν τις νῦν πλέκη / γυνή στέφανον, ἐρᾶν δοκεῖ* (400-1) があります。何のリースを編むかは不明ですが、家庭内でのリースづくりはごく普通のことだったように見うけられます。
- 18) イストミア競技での勝利者に授けられるリースは、むしろセロリ *σέλινον* のそのほうが有名であったかもしれません (cf. 2.16, 8.64)。セロリのリースはネメア勝利歌 4.88 にも出ます。
- 19) 実物は東京上野の国立博物館で開催された「古代ギリシャ——時空を超えた旅——」（2016 年 6 月-9 月）に出品されたものです。その特別展を見逃した私のために、小川洋子氏が図録のカラーコピーを送ってくださいました。なお、リースないし花冠一般については、小川氏の『テオプラストス 植物誌 2』（注 4）の解説「花冠用植物について」（447-80 頁）を、是非、ご一読ください。
- 20) PCG は R. Kassel & C. Austin (edd.), *Poetae Comici Graeci* (Berlin & New York, 1983-2001?) の略号です。断片の多くは *Athēnaios* (2-3 世紀), *Deipnosophistai* 『食卓の賢者たち』を典拠としています。
- 21) 訳文は、テオプラストス著、森進一訳『人さまざま』（岩波文庫、1982）、51 頁を借りました。
- 22) 訳文は、プラトン著、藤沢令夫訳『国家（上）』（岩波文庫、1975）、155 頁を借りました。
- 23) 同上、9 頁。
- 24) Cf. J. Henderson, *The Maculate Muse, obscene language in Attic comedy* (Oxford UP, New York & Oxford, 2nd ed., 1991), pp.134-5.